

アルベール・カミュ、全面戦争と中庸の哲学、文学を通して考察する都市の空襲

モーリス・ヴェイエンベルグ

講演は三部から成り、序論では私の考察の一般的な背景を素描し、暴力の正当化の問題と全面戦争の問題をとりあげた。この2つの問題は、ともに現在のもつ意味（および、それを脅かす無意味）についての考察に繋がる。暴力の正当化を推進する動き、極端へ走る傾向を強調したのは、プロシアの将校クラウゼヴィッツであり、この動きが高まると全面戦争となる。ルネ・ジラルドは、近著『クラウゼヴィッツの息の根を止める』で、かの『戦争論』の著者クラウゼヴィッツの思想からいくつかの結論を引き出している。都市とその住民に対する行き過ぎた空爆、処刑、虐殺、収容所、最終兵器の開発、恐怖の均衡、きれいな戦争、恐怖心の利用、テロの発達、この動きの道標となっているのである。

第二部では、カミュについて述べ、暴力に対する彼の反応、広島への原爆投下に対する彼の反応をとりあげた。カミュは、1945年8月8日付けの『コンバ』紙の記事で原子爆弾の使用をはっきりと糾弾している。彼は全面戦争へと通じる極端に走る傾向に対するひとつの答えとして、限度の哲学（実際にはこれらの用語は使っていないが）を展開させている。このような思想は、『反抗的人間』と「『反抗的人間』擁護」に結実する。それは、当時支配的であった否定から肯定を引き出し、合理的な限度内で一方の極が他方の極を支えるという制御のきいた形で機能する二律背反の中で、ウイとノンを保持する試みにほかならない。肯定は否定の節度であり、逆もまた真なりである。このような節度は、極端に走る傾向を妨げるものである。

第三部では、都市の空襲を扱った日本とドイツの文学作品をとりあげ、この問題を扱った文学の特性を論じるため、両国におけるこの種の文学についての議論について簡単に述べた上で、大田洋子の『ほたる』、竹西寛子の『儀式』、井伏鱒二の『かきつばた』、三島由紀夫の『豊饒の海』四部作、ハンス・エーリヒ・ノサックの『没落』、ワルター・ケンポウスキの『高度計』、カート・ヴォネガット・ジュニアの『スローターハウス5』などに言及した。